

怒りの手紙が明かしたあの人の意外なプロフィール



(部分)

六角承禎条目写

（草津市蔵・春日家文書）

六角承禎（義賢（よしかた）、1521～1598）は、近江に拠点を置いた、戦国時代から安土桃山時代の武将です。この「六角承禎条目写」は、承禎が息子・義弼（よしすけ）（のちの義治（よしはる））付きの家臣らに宛てた叱責の手紙です。これ自体は書き写されたものであり、冒頭部分が欠けていますが、文言からは承禎の怒りが生々しく伝わってきます。

事の発端は、義弼が承禎の了承を得ずに美濃の戦国大名・斎藤道三の孫娘との縁談をまとめたことでした。当時、六角氏は道三に追放された土岐頼芸（よりあき、よりのりとも）をかくまっており、さらに朝倉氏・織田氏と手を結んでいたため、対立する斎藤氏との縁組は承禎の築いた周辺諸国との関係を乱すものだったのです。承禎は十四条に及ぶ理由を挙げ、「義弼はまだ若く分別がない（当時17歳）のだから、お前たちがしっかりしなければならない」と家臣らを厳しい口調で責めています。その中からは当時の六角氏を取り巻く近江周辺の状況を読み取ることもできます。

実はこの資料は、話の本筋とは別の部分で大きな注目を集めています。斎藤道三の出自について書かれた、後世のものではない、ほぼ同時代の貴重な資料であるためです。かつては小説などのイメージもあり、道三は「油売りから一代で大名にまで成りあがった」野心的な人物とされてきました。しかし1960年代にこの「六角承禎条目写」が『岐阜県史』で紹介され、述べられている斎藤氏の来歴から、京の僧侶から美濃で身を起こしたのは道三の父・長井新左衛門尉だったことが分かったのです。下剋上によって得た地位を引き継いだ道三が、謀略を尽くし美濃の守護代となったことも、承禎は激しく非難しています。

過去の出来事である歴史は不変のものだと思いますが、歴史資料の発見によって、全く異なる事実が判明することもあります。私たちの認識をがらりと変えてしまうような史料が、もしかするとまだどこかに眠っているのかもしれない。

（令和2年4月・草津宿街道交流館 富田 由布子）